

書 評

飯田祐子編

『『青鞆』という場—文学・ジェンダー・〈新しい女〉』

三 杉 圭 子

『『青鞆』という場—文学・ジェンダー・〈新しい女〉』と題された本書は、『彼らの物語』（1998）で日本近代文学を、ジェンダーの視点から論じた飯田祐子の近編書である。飯田は夏目漱石を最高峰とする日本近代文学という圧倒的に男性中心に動いていた作家作品群を対象に、当時隠蔽されていたといってもよいジェンダーをめぐる文壇の諸相に鋭いメスを入れた気鋭の研究者である。その後飯田は、近代に限らず日本現代文学をも対象としてジェンダーを切り口とした批評を展開する仕事を続けている。

さて、この『『青鞆』という場』で飯田が着手するのは、「青鞆社」の機関誌として明治44年（1911）9月から大正5年（1916）2月にかけて発刊された『青鞆』を、日本文学史という直線上の通時的な視点から解放し、その発刊時前後を含めての共時的な女性をめぐる自己表現の磁場としてとらえることである。通読して浮かび上がってくるのは、文学史上了解されている初のフェミニズム雑誌という固定化された『青鞆』像ではなく、『青鞆』をとりまく三次元的空間におけるあらゆる表現の可能性の立体的多様性である。

それは、時に文学と呼ぶには未熟な、しかし自己表現の場を求めてやまなかった当時の〈新しい女〉の萌芽を露呈する一般の女性読者／筆者たちの姿を、時には文学史上、自他ともに認める大きな足跡を残した与謝野晶子の擬古体から言文一致体への文体の揺らぎから透けて見える文壇におけるジェンダーの諸相を、晶子のように名を成さぬまま女が語ることの難しさからめとられ

『青鞜』という場

た杉本正生という書き手の苦悩を、絵画という造形芸術をとおして自らを吐露せんとする長沼智恵子（後の高村光太郎の妻、「智恵子抄」のヒロイン）の曖昧さと混迷を、「地方の女教師」というアンビバレントな価値を担わされた女性インテリの危うさを含んでいる。

すなわち、本書が明らかにするのは、既成の日本文学史には現れ出でにくかった、著名女性作家・芸術家の諸側面であり、また本書の編著者たちによって再発掘、再評価された女たちの表象である。

さらに、隣国朝鮮の民族性の背後に立つ国家体制と政策に翻弄される雑誌『新女子』の推移を論じることによって海を越えて多少の時差と誤差をもって『青鞜』が読者に与えた影響を広い文脈の中でとらえる試みは、『青鞜』のみならず本書そのものの果敢な越境性のメタファーとして読むことができよう。

「序にかえて」と題された「『配置』について考えるために」で、編者飯田は本書の目的と構成を明らかにしている。まず、『青鞜』が通常認識されている以上に複雑な表現としての〈新しい女〉たちの多種多様な欲望によって形成されていたことを指摘する。そのうえで、『青鞜』という雑誌が直線的に自明のものとしていたと考えられてきた「流れ」を超えて、ジャンルの越境をこそ『青鞜』を特徴づけるアプリアリな要因とし、そこにさらにジェンダーの視点を導入することで、これまでにない『青鞜』論を試みている。

本書は三部構成をとっており、第Ⅰ部「『女』が書くこと」では、文体をめぐるジェンダー闘争と「女が書くこと」の困難さが示唆するところをとりあげている。第Ⅱ部「〈新しい女〉再考」では、この用語を生み出した当時の土壌に着目し、ジャンルの越境—近代劇、詩と絵画、さらに民族主義と〈新しい女〉の確執へと視野は広がってゆく。第Ⅲ部「『青鞜』の位置」は、これまで文学史上でとりあげられることのなかった一般女性が「書き手と読み手」として起こした相互作用に焦点を当て、『青鞜』を新たな文脈においてとらえなおし、「地方の女教師」という一種のステレオタイプを考察する論によって本書は締めくくられている。しかし本来本書の目的は『青鞜』をめぐる状況の共時

『青鞥』という場

的、多角的な読み直しを図るものであるから、必ずしも順を追って読むことを読者に求めるものではないだろう。

では、おおまかにそれぞれの論客の視点と問題提起をおさえておこう。第Ⅰ部「『女』が書くこと」の第1章「文におけるジェンダー闘争—『青鞥』創刊号の三つのテキスト分析を中心に」において、関礼子は、与謝野晶子の「そぞろごと」、田村俊子の「生血」、平塚らいてうの「元始女性は太陽であった」をとりあげ、当時、小説という文学ジャンルが男性作家を中心に昇華され、文体においては文語体からより簡潔で明晰とされた言文一致体への移行が進みつつあった時代背景を蘇らせ、ジェンダー化されたジャンルおよび文体における三者三様の「配置」を明らかにする。

第2章「〈語りにくさ〉と読まれること—杉本正生の「小説」で飯田は、新聞から女性同人誌である『青鞥』に発表の場を移した杉本が、女の告白小説というジャンルにこだわったことに注目し、その語りの手法を分析する中で、読み手としての〈新しい女〉の存在を指摘する。ここでは書き手と読み手が織りなす双方向の力学を提示することによっていかに『青鞥』の土壌が形成されていたかが分析される。

第Ⅱ部「〈新しい女〉再考」において、佐光美穂による第3章「〈新しい女〉に見る表象＝代表の政治学—近代劇をめぐる書く女と演じる女の」は、イプセンの戯曲をめぐり、〈新しい女〉の演技と劇評という異なるジャンルにおける表象の「行為」を考察している。松井須磨子という圧倒的な女優の演技と存在感に拮抗するには至らなかったとしつつも、誌面上に展開された劇評論を拾い上げ、『青鞥』に編みこまれた時代の呼吸を臨場感をもって提示している。

第4章「詩と絵画に見る『青鞥』の女性像—「青」のメタファー」で中島美幸は長沼智恵子による創刊号表紙の「水の女」を日本神話の豊玉姫をモデルとした青木繁による「わだつみのいるこの宮」との比較において「謎の女」と論じ、高村光太郎との関係において創作を頓挫する智恵子の限界を指摘する。と同時に晶子の詩における青のイメージを逆説をはらみながらも雑誌名とからめ

『青鞥』という場

て肯定的なものと結論づけている。

第5章「民族と女性、ゆらぐ＜新しい女＞—植民地朝鮮における雑誌『新女子』を中心に」で孫知延は、『青鞥』に影響を受けて1920年3月に創刊された雑誌『新女子』が、朝鮮の女性にかつてない表現の場を与えたにもかかわらず、同年6月には民族独立のイデオロギーに「回収」され、伝統的なジェンダー・ロールの支配下にその短命を終えた経緯を分析している。

第III部『『青鞥』の位置』ではまず第6章「差異化と連帯感—『青鞥』が見せた新しい関係性」において中山清美は『青鞥』という磁場を他の女性雑誌との比較においてとりあげ、女性同士のいわゆるホモ・ソーシャルなものからレズビアニズムまでを含む密接な関係性に着目し、文学が男性ジェンダー化された時代の文脈において『青鞥』が占める位置と影響を検証している。

そして第7章「＜女教師＞という想像力—『青鞥』を醸成する＜ローカル・インテリ＞」で、米村みゆきは『青鞥』創刊に先立つ明治30年代に既に自立した女性像として「女教師」という存在が確立されていたことを指摘し、『青鞥』においてはこの「女教師」がそのジェンダーゆえに苦悩する姿が表象されていると論じている。

このようにして本書は『青鞥』にまつわるジェンダー化された文学およびさまざまなジャンルの芸術をとりあげ、それらをとりにくく幅広い世論、思潮、文壇の動向を分析し、同時に、文学固有の小説、文体、語りの問題を検証してみせる。それゆえ、読者はあたかも『青鞥』をとりにくく明治40年代前後の空間をタイムトラベルをするように呼吸することができる。さらに重要なのは、編著者たちは近年のフェミニズム批評を適宜取り入れ、『青鞥』をめぐる諸問題の今日性を引き出し、その「場」を蘇らせることによって、現代における『青鞥』研究の意義を明確に打ち出している点である。

ジャンルを越えた複眼的視点は基本的に本書の特長である。欲をいえば、詩と絵画を並置し、青のメタファーをもって解説しようとする論などには多少消化不良気味な印象も残るが、試み自体の果敢さは認められる。加えて、他の芸

『青鞥』という場

術ジャンル、たとえば西洋音楽や舞踊についてはどのような言説、議論が交わされていたのかいなかったのかといった興味を触発する点で、本書における役割は十分果たしているだろう。

7章立ての構成は先にも触れたように、ひとつのシークエンスとしてあるのではなく、断片であるがゆえに、それぞれの論者の視点から、「『青鞥』という場」の多様性および複雑性を考察する複眼的視点を具現するのに成功している。統一性の不在は本書の欠点ではなく、さまざまなベクトルに向かう女たちの欲望の交錯を全体として編み出す戦略としてとらえることができる。

評者は英文学科に学び、「青鞥」が18世紀ロンドンの女性芸術サロンに集い、当時「正規」とされていた黒のシルクではなく青いウールのストッキングを着用していたインテリ女性たちのグループ、「ブルーストッキング」の訳語であり、原語は時として教養を鼻にかけるうさんくさい女性を揶揄する言葉として用いられると知って驚いた覚えがある。日本のフェミニズムおよびジェンダー・スタディーズの展開には門外漢の評者は、拙文を書するにあたり、近年の入門的先行文献『『青鞥』を学ぶ人のために』（世界思想社 1999）の出版をはじめ、『青鞥』がフェミニズム批評の中で再評価、再考の対象として注目されていることを知ることとなったが、本書は初心者にとっても『青鞥』および『青鞥』研究の今日性を解説する手引きとして啓蒙的であるだけでなく、その斬新な多角的アプローチをして読み物としてのおもしろさをも兼ね備えていることを記しておきたい。

本書は『青鞥』研究のみならず、日本近代文学および芸術的表象文化研究をジェンダーの視点から再考察する昨今の機運に新たな一石を投じるものであろう。編著者たちの今後の研究動向にさらに期待したい。

（森話社、2002年4月、251頁、本体2,700円＋税）